

# 明治の働く女性「保姆」の絵画イメージ ―久保田米憊《園児遊戯図》《唐子遊び図》の位置づけ―

寺田 早苗\*

## 目次

はじめに 明治年間幼稚園史

一章 保姆イメージの流布

(一) 保姆を描いた作例紹介

(二) 全体の特徴およびまとめ

二章 久保田米憊《園児遊戯図》《唐子遊び図》

(一) 教育と絵画に関する言説

(二) 同時代資料との比較

おわりに

キーワード 日本美術史 幼稚園 保姆 版本 錦絵 新聞挿絵

双六 風俗画報 肉筆画

## はじめに

明治九年（一八七六）に官立で初めての幼稚園が出来た。それに伴い、幼稚園の園児を指導する「保姆」という職業が誕生する。近年保姆に関する研究や幼稚園で行われていた教育内容の研究が徐々に明らかになってきた。しかし保姆の絵画イメージに関してはほとんど触れられ

てこなかった。本稿では、保姆が描かれた作例を、江戸東京博物館、お茶の水女子大学歴史資料館、学習院大学史料館、京都市学校歴史博物館、国立国会図書館、東京都立中央図書館、筑波大学附属図書館、身装画像データベース、朝日新聞社、毎日新聞社の各所蔵資料等をもとに、画像を収集し考察することを目的としている。加えて久保田米憊（一八五二―一九〇六）が描いた《園児遊戯図》《唐子遊び図》を同時代写真資料と新聞挿絵と比較することで、上流階級の子が多く通っていた東京女子師範学校附属幼稚園に比べて一般の子どもが通う幼稚園の保姆はどのような様子だったのか明らかにしたい。そしてそこから考えられる現実と絵画イメージとの差が表していることについて考察を行いたい。<sup>1</sup>  
日本では、古くから子を大切に考える考えがあったといわれている。<sup>2</sup>万葉集におさめられたひとつを見てみよう。

## 長歌

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして俣はゆ

いづくより 来たりしものぞ 眼交まなかひに もとなかかりて

安眠やすみし寝なさぬ<sup>3</sup>

## 反歌（短歌）

銀しろがねも金くがねも玉の何せむに

まさされる宝子たからこにしかめやも<sup>4</sup>

\* 東京都江戸東京博物館学芸員

これは山上憶良(六六〇〜七三三?)が筑前に派遣される旅先で、食事をしながら都に残した子を思い出し、「子は不思議だ、いったいどこから来たのか。子を思つてなかなか眠れない。子は何にも勝る宝だ。」と詠んだ歌である。奈良時代に子をいとおしく思う素直な気持ちを表現したものとして有名な歌だ。この歌は日本ではるか昔から子を愛し、後の子宝思想を生み出したという根拠になっている。しかし、現在でも子供を慈しむ親や地域もあれば、無関心な人、虐待をする人など、当然一概には言えない。実際に飢饉や天災、戦さなどで庶民の暮らしは想像を絶するほど大変であった。安土桃山時代に日本で活躍したルイス・フロイス(一五三二〜一五九七)は、『日本史』の中で、堺の国では貧困や、働き続けるためであったりと様々な理由を挙げて頻繁に墮胎が行われていたことを記している<sup>5</sup>。また柴田純は『日本霊異記』や『今昔物語』などの文献から、捨て子の話がかなり出てくることを紹介し、それが記録に残っていないことを示して捨て子が日常茶飯事であったと推測している<sup>6</sup>。ところが捨て子の習慣は、江戸時代に入る前から大きく転換する<sup>7</sup>。検地や兵農分離が進み、固有の家名、家業を持ち始めたため「家」が営まれ始めた。経済的な安定によって手形を交わす際に読み書きの能力が必要になり、幼い子どもへの教育関心が高まっていったのだ<sup>8</sup>。さらに江戸から明治にかけて時代の大変革が起こると、それまでそれぞれの藩の中で成立していた人々の所属意識を、日本国というひとつの大きな国の一員である国民という意識に変換するため、教育制度の確立は政府によって重要課題の一つとなる。そして、強い身体を持った国民の育成のために、幼いころから体操や唱歌遊戯といった教育が、教課として導入された。その一つに幼児教育がある。

幼児教育<sup>9</sup>は、政治体制の変革に伴う混乱の中、外国人の来日や外来思想の影響を受けて近代国家としての取り組みの中でいち早く着手され、幼児のための教育施設として現れた<sup>10</sup>。明治政府は、官立の幼稚園

が開園される以前の二八七六年に、すでにフィラデルフィア万国博覧会にて教育参考品として教育遊具である恩物を出品した<sup>11</sup>。このことから、明治政府が幼児教育を近代国家として世界へアピールできるものとして認識し、期待をかけていたことがうかがえる。恩物とは、遊びを通して自然の摂理を学ぶことを重要な考えとしたフレーベル教育の教育遊具であった。円筒や立方体の積み木や紙を組み合わせ、遊びながら自然界の法則について学ぶことが出来るものだ。明治十年(一八七七)十一月二七日には東京女子師範学校附属幼稚園に皇太后宮と皇后宮が行啓し、園内の各部屋や園児が遊戯や唱歌をする様子を見学し、激励の言葉を投げかけている<sup>12</sup>。また、当時宮内省の一部であった御歌所という部局が取り仕切った歌詠み会<sup>13</sup>でも「幼稚園」が兼題にあがるなど、文芸作品の中にまで幼稚園の話題が及び、当時、「幼稚園」が国家の中で高い関心事項であったことがわかるだろう。

こうして幼稚園への関心が高まり各地に設立されたことにより、当時日本で最先端の幼児教育を学ぶための保姆養成機関が設立され保姆という女性の新たな職業が誕生した<sup>14</sup>。

明治期には、資本主義の流入により農工業分野以外にも女性の新たな職業拡大が進んだ。学制の発布以降保姆や女教師、女医、看護婦といった職業が誕生し、明治末には婦人記者、電話交換手などが生まれ、大正から昭和初期にかけて職業婦人と呼ばれた。当時の新聞を広げると、女性の教師に関する記事は多数みつかるところが保姆の記事となるとその数がずっと少なくなる。本稿の意義は、保姆という職業に射程を定め、保姆の絵画イメージを集めることに注力し、時代によって異なる女性のイメージをひとつひとつ解き明かすことで明治期の数少ない女性の労働の場の一端を明らかにすることにある。

これまで教育に関する展覧会の中で幼稚園に関するテーマが取り上げられることはあったが<sup>15</sup>、資料の少なさから保姆が描かれた作例だけを

挙げて、美術史的な側面から研究されることはほとんどなかった。

そこで本稿は、明治期の保母のイメージを探るために以下の手順をとった。まず明治期の幼稚園の歴史を概観し、一章で保母が描かれている絵画作品を挙げてその特徴を考察する。二章で絵画イメージと比較して、現実の保母の状況はどのようなものだったのか、検証が出来る最適な事例として、明治二十年前後に制作された久保田米僊による《園児遊戯図》《唐子遊び図》を取り上げる。そして現実の保母の様子と比較して、絵画イメージ内の保母像がいかなるものだったのか考えたい。

### 明治年間幼稚園史

日本の近代教育は、明治五年（一八七二）に制定された「学制」の布告によつてはじまる。その「学制」第二章の中に、小学校の一種として「幼稚小学」が盛り込まれた<sup>16</sup>。これが日本の法の中で幼児教育機関の名称が掲載された最初のものとなる。

「幼稚小学ハ男女ノ子弟六歳迄ノモノ小学ニ入ル前ノ端緒ヲ教ルナリ」ここで想定される児童は小学校に入る前の六歳までの男女であったが、当時は小学校開設が優先されたため幼児教育機関としての幼稚小学は実現をみなかった。

そこで、政府が主導するよりも早く設立されたのは、民間の幼児教育機関であった。京都では、学制布告に先んじて、明治二年（一八六九）に開校した上京第二十七番組小学校の敷地内に、明治八年（一八七五）、日本で最初の幼児教育機関が開園した。京都は「禁門の変」やその後の火災のため多くの人や文化を損失した後であったが、各家が竈金という公共資金を出し合い、寺子屋に変わるそれぞれの学校を自主運営したよう<sup>17</sup>。そして、地域の人材育成に熱心な町組内の要請もあり、明治八年に、先にふれた上京第二十七番小学校の敷地内に「幼稚遊嬉場」が開

設された。政府主導の教育制度の制定以前に、地域の資金をもとに未来の人材を育成しようとした人々の高い意識の中からできた幼児教育機関が存在することは特筆すべき点である。高田文子は、当時京都には外国人教師としてドイツ人のルドルフ・レーマン（一八四二～一九一四）が雇用されており、京都府とレーマンとの間には「学校用書籍並小児遊戯器具」をドイツから取り寄せる旨の契約書を交わしていたことから、フレーザー教育の情報を直接レーマンから得ていた可能性を示唆している。すなわちこの民間発の幼児教育機関もフレーザー教育の影響を受けていたと思われる<sup>18</sup>。

その後、日本で初めての官立幼稚園として、明治九年（一八七六）に東京女子師範学校附属幼稚園が設立される<sup>19</sup>。同園では、ドイツでフレーザー教育を学び、ドイツに留学中であつた松野礪（一八四六～一九〇八）の妻となつて来日した松野クララ（一八五三～一九四一）が主席保母となり、彼女によつてフレーザー教育が実践され、豊田英雄（一八四五～一九四一）や近藤濱といった保母に通訳を介して保育方法が伝えられた。その後、全国にフレーザー教育が伝播することを考えると、彼女たちが与えた日本の幼稚園教育への影響は計り知れないものであつた。同園は保母を鹿児島に派遣したり、大阪から人を招いたりして保育の精神を地方にも伝えた。その後、鹿児島、大阪、宮城<sup>20</sup>に次々と幼稚園が設立され、全国に幼稚園が設立されていった。教育方針は東京女子師範学校附属幼稚園と同じくフレーザー教育に倣つたものである。

明治十二年（一八七九）九月には「教育令」が公布され、幼稚園と学校を区別し、幼稚園は私立公立区別なく文部卿の管轄下に敷かれる。明治十三年（一八八〇）十二月教育令改正、明治十四年（一八八一）には「府県立学校幼稚園書籍館等設置廃止規則」、明治十九年（一八八六）に小学校令公布と、次々に行政は法整備をしていった<sup>21</sup>。明治十三年（一八八〇）には五園、園児数四二六名であつた幼稚園は、明治十九年

(一八八六)には三八園、園児数二五八五名となり、明治が終わる明治四五年(一九一二)には園数が五三三園と着実にその数を全国に増やしていった<sup>22</sup>。東京女子師範学校附属幼稚園に倣う多くの幼稚園は、家庭では学ぶことができないような学習を中流、上流階級の子息に行う幼稚園であった。一方で政府は明治十五年(一八八二)、貧困層を含む広く一般の幼児のための簡易幼稚園の設立を推奨した。しかしこちらも政府が主導するよりも、早く設立されたのは、民間の幼児教育機関であった。明治十五年頃には裕福な家庭の子供の入園を想定した幼稚園ばかりではなく、貧困層を含む幼稚園も存在しており、社会において「幼稚園」という施設の多様化が少しずつ進んでいったと考えてよい。

それでは、多様化する「幼稚園」がどのようなイメージで捉えられていたのか、とりわけそこで働く保姆の姿が絵画の図像を通してどのように流布したのだろうか。次章で具体的な作例を挙げて検証してみたい。

## 一章 保姆イメージの流布

日本で最初にできた官立の幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園設立は、新聞でも報じられ、その保育方法もその後設立された全国の幼稚園の手本となった。そのため幼稚園の保姆や園児のイメージへの影響も少なからずあったと考えられる。そこで、「東京女子師範学校附属幼稚園規則」(以下「幼稚園規則」)の保育内容をもとに分類を行い明治期に発行および制作された保姆および園児の図を分析した。絵画作品を紹介する前に、その「幼稚園規則」を説明する<sup>23</sup>。まず、入園資格は原則として満三歳から学齢期まで、保育時間は一日四時間、保育内容は「物品科」「美麗科」「知識科」の三つに分かれ、その中で二五の細目に分かれていた。【表1】に示したのは細目の内容である。このうち二〇種は恩物である。恩物の説明は、明治十二年(一八七九)に出版された関信

【表2】『幼稚園法二十遊戯』で紹介された恩物

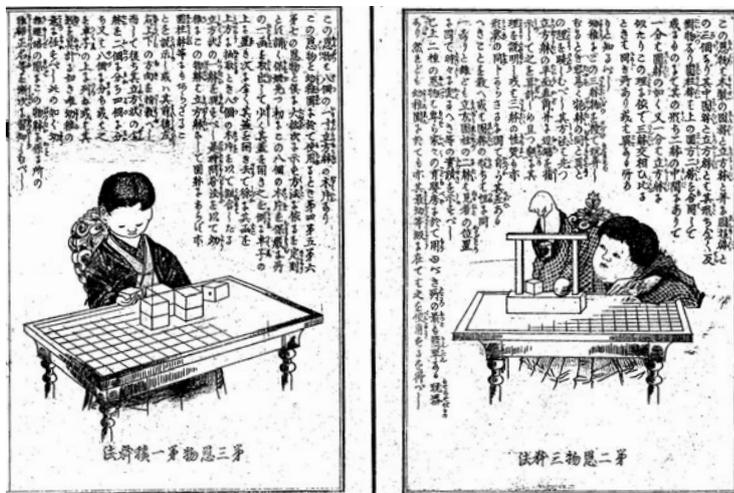
恩物	内容
第一恩物	六球法
第二恩物	三鉢法
第三恩物	第一積鉢法
第四恩物	第二積鉢法
第五恩物	第三積鉢法
第六恩物	第四積鉢法
第七恩物	置板法
第八恩物	置箸法
第九恩物	置鑲法
第十恩物	圖画法
第十一恩物	刺紙法
第十二恩物	繡紙法
第十三恩物	剪紙法
第十四恩物	織紙法
第十五恩物	組板法
第十六恩物	連板法
第十七恩物	組紙法
第十八恩物	摺紙法
第十九恩物	豆工法
第二十恩物	模型法

関信三『幼稚園法二十遊戯』(明治12年3月)を元に執筆者作成

【表1】「東京女子師範学校附属幼稚園規則」

番号	細目
1	五彩球ノ遊ビ
2	三形物ノ理解
3	貝ノ遊ビ
4	鎖ノ連鎖
5	形体ノ積ミ方
6	形体ノ置キ方
7	木箸ノ置キ方
8	環ノ置キ方
9	剪紙
10	剪紙貼付
11	針画
12	縫針
13	石盤図画
14	織紙
15	畳紙
16	木箸細工
17	粘土細工
18	木片ノ組ミ方
19	紙片ノ組ミ方
20	計数
21	博物理解
22	唱歌
23	説話
24	体操
25	遊戯

牧野由理『明治期の幼稚園における図画教育史研究』風間書房、2016年、28～29、35～38頁を元に執筆者作成



【挿図1】『幼稚園法二十遊戯』国立国会図書館蔵  
(国立国会図書館デジタルコレクションより転載)

三による和綴じ十七丁の『幼稚園法二十遊戯』に詳しい。フレールによって草案された二〇種類の恩物の取り扱いについて解説されている【挿図1】<sup>24</sup>。

恩物二〇種類の内容については【表2】<sup>25</sup>にまとめる。なお、本稿では「唱歌遊戯」も加える。「唱歌」とは歌う活動、「唱歌遊戯」とは歌に動作をつけて歌う活動と定義する。各々の絵画作品の題材の分類は、本稿末の【表3】「題材・内容」に示した。

(二) 保母を描いた作例紹介

分類対象とした作例には、肉筆画のほかに、子供の玩具である双六、

報道という側面が強い新聞の挿絵、雑誌の挿絵など、媒体や鑑賞対象が実にさまざまなるものを挙げる。そもそも保母が描かれた資料の少なさが要因だが、まずは絵画イメージとしてどのようなものが当時存在していたか提示することで、次なる研究の基礎準備となる意義があると考えた。より詳細な分類、分析は今後の課題である。以下、それぞれの作品について、題名、作者名、出版物の場合は版元、制作年、形態の順で作品解説を行う。なお、所蔵は【表3】に示した。

【図1】 幼稚園 卷之下

作者・桑田親五／訳

制作年・明治九年〜十一年（一八七六〜一八七八）

形態・書籍挿絵、木版墨摺



【図1】『幼稚園 卷之下』国立国会図書館蔵  
(国立国会図書館デジタルコレクションより転載)

『幼稚園』は、フレール教育の本を数多く出版していた、イギリス人ロンジ夫妻 (Johannes Ronge (一八一三〜一八八七) Bertha Ronge

（一八一八—一八六三）が著したフレールベル教育の解説書<sup>26</sup>を翻訳し、出版したものだ。本図は、背後に見える鳩小屋や洋風建築物や子供のポージングから、この解説書の挿絵を模写したものと考えられる【挿図2】。一人の女性と数人の子どもが手をつなぎ輪になって遊んでいる。「家鳩」という歌に合わせて輪の中にいる人が外に出る遊びで、本図でも二人の子供が輪の中から勢いよく走り出す。年長の女性は遊ぶ子らを慈愛のまなざしで見つめている。



【挿図2】 Johannes and Bertha Ronge “A Practical Guide to the English Kindergarten (Child’s Garden), for the Use of Mothers, Governesses, and infant Teachers.” 1877, より転載

【図2】 幼稚鳩巢戯劇之圖（写し）

作者…青水

制作年…昭和三十一年（一九五六）写し、原画は明治十一年頃（一八七八年頃）

形態…未詳

本図は東京女子師範学校附属幼稚園の風景を開園間もない明治十一年頃に描いた作品の写しである。同園が開園間もない当時の写真に本図が写りこんでおり同様の作品が当初、室内に掛けられていたことがわかっている<sup>27</sup>。作品の写しではあるものの、描かれた内容を知るには十分な資料といえる。園児と三人の保姆が手をつないで輪になって「家鳩」をして遊んでいる。園児の中には日本人だけでなく、茶色の毛髪をした外国の子供も描かれている。本作を所蔵するお茶の水女子大学歴史資料館によると、ここに描かれている保姆は、前述の松野クララと豊田芙雄、近藤濱である。主任保姆の松野クララは足元まで隠れるドレスを身に着け、保姆の豊田芙雄と近藤濱は着物に羽織を着、髪は髷を結っている。表情は微笑む程度で表現に硬さが残る。本園に入園する入園児の大半は

【図2】 《幼稚鳩巢戯劇之圖》（写し）  
お茶の水女子大学歴史資料館蔵

上流階級の子弟であった。

【図3】 幼稚園初歩 巻一

作者…飯島半十郎／著 学新竹か／画

制作年…明治十八年八月（一八八五）

形態…書籍挿絵、木版墨摺



【図3】『幼稚園初歩 巻一』国立国会図書館蔵  
(国立国会図書館デジタルコレクションより転載)

本書はフレール教育を紹介した著書『幼稚園初歩 巻一』の挿絵である。

着物に羽織を重ねた保姆と園児が低い机を囲み、座って織紙をしている。前傾姿勢で織紙に夢中になる子や隣の様子を見る子など細かな機微を写し取っている。背後の壁にはフレールの肖像画や古画が掛けられている。前頁にもフレールの肖像画が描かれていて、着物姿の年長者が子供という。寺子屋同様の江戸時代以来の室内風景に、フレールの

肖像画を配することで新しい教育風景だということを見るものに見えるように示しているようだ。

【図4】 学校技芸寿語録

作者…井上探景／画 版元…松野米次郎

制作年…明治二〇年十一月（一八八七）

形態…双六、木版色摺

【図4】《学校技芸寿語録》  
東京都立中央図書館特別文庫室蔵

小学校で行われる活動を描いている。その中で、「幼稚園」は、「小学校」の前段階として位置づけられ、双六の出発点であるふりだしに描かれている。前景には園児とともに柵の置物をのぞく保姆が描かれる。床には花柄の絨毯が敷かれ、園児の装いは洋装で、フリルがついた明るい色のドレスやズボンに、靴を履き、髪飾りや帽子を身に付けている。保姆も同様で、身なりから富裕層の子供とその面倒をみる保姆が想定されている。後景には、教室があり、園児が机の前に座り掛絵を使った授業

を受けている。保姆は机を指さし、教えている。園児はおとなしく目の前の課題に向き合っている。どの人物も感情が抑えられた表現がなされている。

【図5】 大阪朝日新聞 一八八七年二月八日号 二面

作者…未詳

制作年…明治二〇年二月八日(一八八七)

形態…新聞挿絵



【図5】 大阪朝日新聞 1887年2月8日号 2面

本図は大阪朝日新聞の記事の挿絵。大阪府の某小学校の式典で同校附属幼稚園の園児と保姆が歌を歌ったことが報じられている。それによると「附属幼稚園の生徒が保姆の弾ずるは洋琴パイプオルガンの音につられて」「皇御國」と『花さく春』という唱歌を歌ったという。

輪になって並ぶ大勢の園児の間に三人の保姆が立っている。保姆はみな柄の着物を着た者や洋服を着ている者がいる。男児は洋服を着ている

ようだが、女兒の洋装はみられない。保姆は右手をあげ、園児もみな右手を挙げているが、中には手を合わせたか胸の前で両方の手のひらを上に向けて開いている子供もいる<sup>28</sup>。記者の目の前で起きた出来事を言葉と絵で切り取り読者に伝える報道という性質上、また、園児がみな同じ行動をしていないということから、現実に近いものを表しているのだろう。

【図6】 園児遊戯図 唐子遊び図

作者…久保田米僊

制作年…明治二十一年〜二十三年

(一八八八〜一八九〇)

形態…紙本墨画淡彩 対幅

本図は尚徳幼稚園が明治二十一年に開園した際に同園に贈られた可能性を指摘されている図である<sup>29</sup>。

幼稚園の様子と唐子遊びを描いた対幅である。右幅は園児が保姆と共に唱歌遊戯を行う様子が描かれる。園児が一列になり、皆右手足を挙げて歌を歌っている。子供たちの表情はやや上方を見上げ、口を大きく開けて、乱れることなく踊っている。それぞれの顔は、眉がハの子の子や、二重まぶたの子など、それぞれの園児の個性が描き分けられている。共通しているのは、皆ふっくらとした顔の輪



【図6-1】《園児遊戯図》



【図6-2】《唐子遊び図》

京都市学校歴史博物館

郭であることだ。列は、左上から右中央、そして左下とつ字に曲がるようにして描かれている<sup>30</sup>。そしてその周りに保母が三人配されている。保母のひとりは足まで長さがあるドレスを身に着け、オルガンを弾き、中央の女性は羽織に縞模様様の着物を身に着け園児に振り付けを教えている。画面左の保母は笏拍子をたたいて、園児とともに歌っているようだ。園児を優しく見つめている。左幅には中国風の服装をした子供が五人描かれている<sup>31</sup>。画面右側の子供が籠から芙蓉の花を取り出し、左手に高く掲げている。ほかの子供たちは両手を挙げて、花を求めているようだ。年長の者と楽しそうに遊ぶ様子は両幅共通しているようだ。両幅を通して古今東西、場所と時代が異なっても楽しく遊ぶ子の姿は共通することをよく表している<sup>32</sup>。

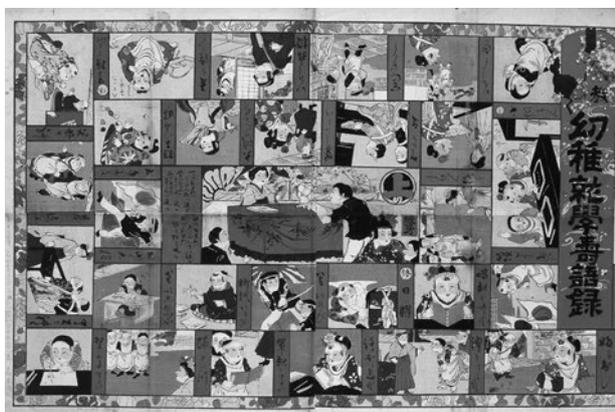
【図7】 教いく幼稚就学寿語録

作者・国秀 版元・森本須三郎

制作年・明治三二年（一八八九）

形態・双六、木版色摺

双六の上がりの一コマ。卒園式で袴を着た保母が園児に卒園の証書を渡している。園児は証書を受け取り頭を下げる。保母の側には菊の紋様の垂幕があり、式の厳肅な雰囲気伝わってくる。



全体



部分

【図7】《教いく幼稚就学寿語録》  
玉川大学教育博物館

【図8】 幼稚保育之図

作者・武村耕靄

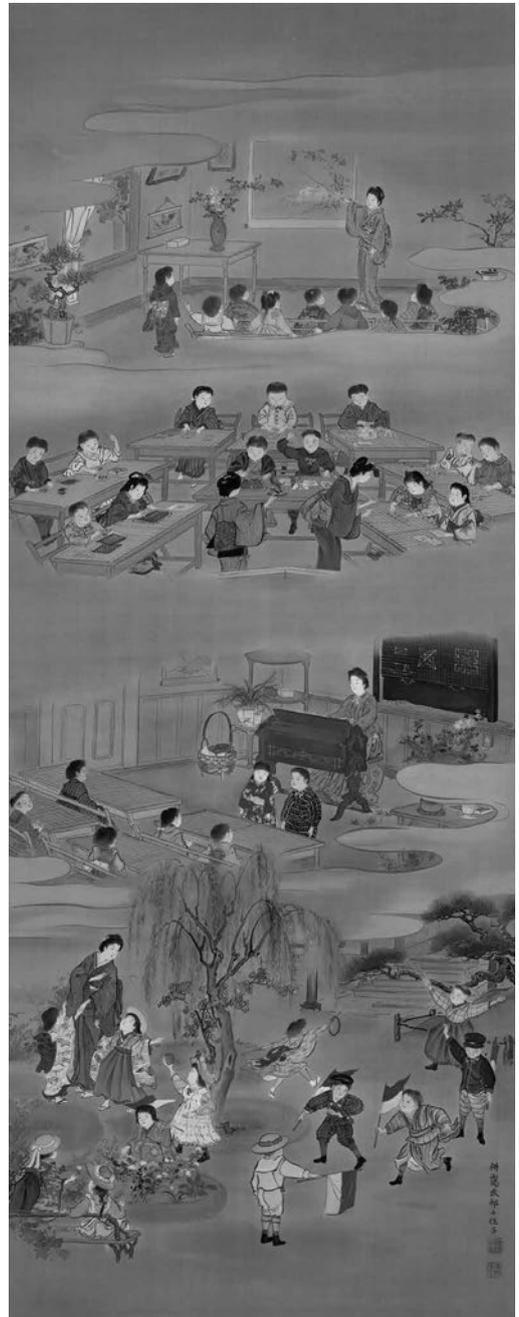
制作年・明治三三年（一八九〇）

形態・絹本着色

本作は、実際に東京女子師範学校で画学教授として勤務していた作者が描き、明治三三年に行われた日本美術協会秋季展覧会に出品した作品だ<sup>33</sup>。

談話の授業、恩物を使った授業、唱歌の様子、外遊びの様子を描いている。上から順にみる。一段目では薄緑色の着物に草履を履いた保母が、教材として使用している掛け軸を棒で指し示し、談話の授業を行っている。長椅子に座った園児は手を挙げて積極的に参加しているようだ。二段目には、幼児用の教育遊具である恩物を使用する授業の様子が描かれ

ている。園児は机をコの字に二列に並べ、その間に保母が立ち、園児を指導している。鳩の模型を右手に持つ保母の前で園児は、「はと」と書いたり、隣の者と話しながら楽しそうに授業を受ける様子が印象的だ。園児を指導している保母は二人とも着物姿で描かれているのは対称に、園児はピンクのドレスや青いセーラー服など和装の中に洋装の者も混ざっている。三段目の場面では、保母がオルガンを弾き、二人の園児が立って歌を歌っている。保母のスカートの丈は長く、足元まで覆われた桃色のドレスに、水色のリボンを首元で結んでいる。髪型は、後頭部の高い位置で髪をまとめた束髪だ。最後の場面では、保母と園児が外で遊ぶ様子を描いている。園児は思い思いの遊びを行っていて、元気いっぱい駆け回っている子や、お花摘み、泥団子を保母に見せる子や甘い子など、さまざまな遊びを描きつつ園児の自由な姿が描かれる。保母は着物姿にやはり束髪である。上から三段は各授業を真面目に受ける園児と保母の様子、四段目では外遊びの様子もひとつひとつの遊びを描き分けていることから、本作は幼稚園での行いを記録、紹介するような性質



【図8】《幼稚保育之図》  
お茶の水女子大学歴史資料館蔵

格を帯びている。

【図9】 幼稚園教育遊双六

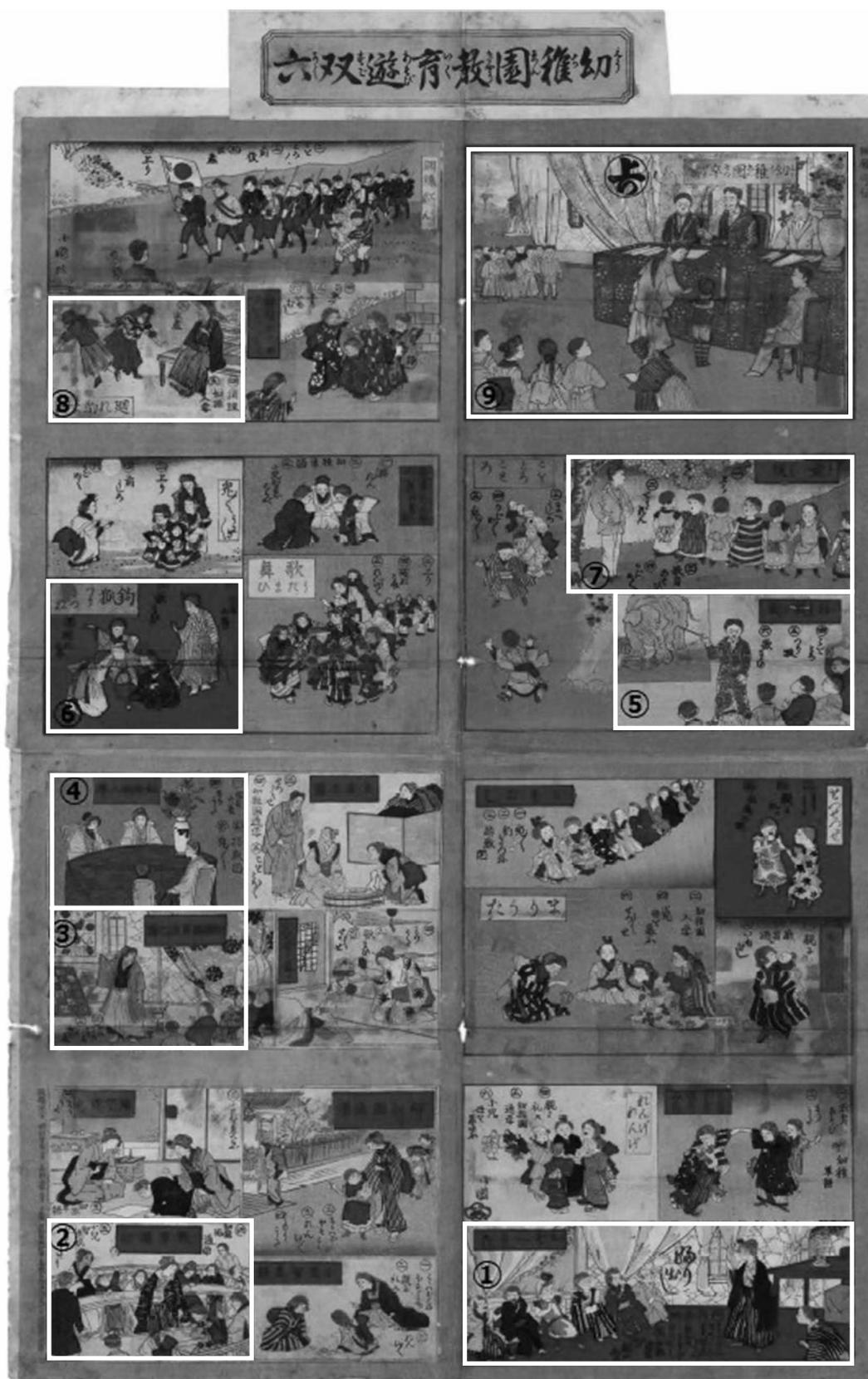
作者…小国政 版元…福田熊次郎

制作年…明治二五年（一八九二年）

形態…双六、木版色摺

本図は、幼稚園でさまざまな経験をした後に卒園して上りにたどり着くという双六だ。双六の二五コマのうち、保母が描かれているのは、九コマある。図①は教え歌を保母に合わせて園児が歌い、図②③⑤は教室の中で園児が椅子に座って保母や男性の教員の授業を聞いている。図⑥はわらべ歌、図⑦⑧は外遊びの様子が描かれている。図④⑨は入学式と卒業式で式典の様子が描かれている。どのコマに描かれる園児も皆行儀よく保母の言うことを聞いているようだ。

多くの保母は、羽織に縞袴、革靴を履き、髪は日本髪を結っている。男性の教員も登場している。着物姿の園児の中に、洋装のドレス、頭に



【図9】《幼稚園教育遊双六》国立教育政策研究所 教育図書館蔵  
(国立教育政策研究所 教育図書館より転載)

花飾りをつけた子が混じるなど、富裕層の子供が描かれている。

【図10・口絵3】 幼稚園双六

作者…山崎暁三郎 版元…山崎暁三郎  
制作年…明治三五年（一八九二）  
形態…双六、木版色摺



全体



部分

【図10】《幼稚園双六》  
江戸東京博物館（89205272）

双六の上りのコマ。公園内で四名の保母がそれぞれ二列になった園児の列を引き連れている。公園で外遊びをしに来た様子を描いているようだ。保母は着物を身に着け、園児の装いは着物姿の中に洋装の者も混じっている。

【図11】『風俗画報』第七三号「遊戯室の図」

作者…坂巻耕漁／画 発行元…東陽堂  
制作年…明治三七年六月十日（一九〇四）  
形態…雑誌挿絵、石版画



【図11】《遊戯室の図》『風俗画報』73号  
江戸東京博物館（94202043）

『風俗画報』は明治三二年（一八八九）から大正五年（一九一六）まで刊行された日本で初めてのグラフィック雑誌だ。「遊戯室の図」は、そこに掲載された幼稚園の記事の挿絵である。幼稚園の三つの情景を描く。画面を三つに割り「通学の図」と「積木之図」と「遊戯室の図」と題する。うち保母が描かれているのは後者二つである。「積木之図」では二人掛けの机と椅子に園児が座り、恩物教育のひとつ、積み木を組み立てている。一番前の園児はやんちゃそうに口角を上げ、体は横を向き今にも走りだしそうで、束髪に羽織を着た保母に手を取られ、積み木を握らされている。下方の「遊戯室の図」では、日本髪を結った保母はオルガンを弾き、束髪で羽織を着たもう一人の保母は、園児と手をつなぎ輪になって遊戯をしている。保母は優しそうな笑顔を隣の園児に向けている。

り紙」、「板ならべ」、「水ぐるま」、「ぬひとじ」……と幼稚園で行うであろ

本作は、幼稚園で行う事柄が各コマに描かれている双六だ。「唱歌」、「折



【図12】《小供風俗幼稚園雙録》国立教育政策研究所 教育図書館蔵  
(国立教育政策研究所 教育図書館より転載)

【図12】 小供風俗幼稚園雙録  
作者…宮川春汀／画 版元…秋山武右衛門  
制作年…明治二十九年（一八九六）  
形態…双六、木版色摺



【図12-4】  
唱歌



【図12-3】  
犬ころこひへ



【図12-2】  
板ならべ



【図12-1】  
ふりだし



【図13】《華族女学校春季運動会 幼稚園遊戯》  
『風俗画報』252号  
江戸東京博物館 (94202223)

【図13】 『風俗画報』第二五二号「華族女学校春季運動会 幼稚園遊戯」  
作者…小林洗美／画 発行元…東陽堂  
制作年…明治三十五年六月十日（一九〇二）  
形態…雑誌挿絵、石版画

う事柄が説明的に描かれている。【図12-1】の「ふりだし」のコマの  
保母は着物姿に銀杏返しという鬘を結っている。【図12-2】の「板な  
らべ」のコマでは保母が教室内で恩物授業である板ならべを教える様子  
が描かれる。【図12-3】「犬ころこひへ」のコマでは保母と女兒が丸  
く輪になって遊んでいる。いずれの人物も着物である。園児の中には髪  
飾りをつけている者もみられる。保母は髪を頭上高く結び上げた束髪姿  
である。【図12-4】の「唱歌」のコマは、文字通り唱歌の様子を描く。  
着物を着て束髪を結った保母がオルガンを弾き、二列に並んだ園児が唱  
歌を唱っている。

『風俗画報』の挿絵である。華族女学校の運動会の様子とともに同校の附属幼稚園の園児も運動会に参加する様子が描かれている。画面上部が幼稚園で園児が競技をする場面を描いたものだ。タイトルは「幼稚園遊戯」だが、内容から競技といえるだろう。その内容は、洋服姿の男児が色のついた玉を拾い集めて同じ色の旗をもつ園児の袋にいれる競争をしている。着物にたすきをかけて参加する女児も数人描かれている。保姆は袴姿に髪を高く結い上げた束髪姿で園児を見守り、時には補助をしている。ギャラリィに応援されながら一所懸命に玉を集める園児らの活気が伝わる。

【図14】 大阪毎日新聞 一九〇三年三月二十九日号八面「新夫人」

制作年・明治三十六年三月二十九日（一九〇三）

形態・新聞挿絵



【図14】 大阪毎日新聞 1903年 3月29日号8面「新夫人」

大阪毎日新聞に連載された小杉天外作「新夫人」という新聞小説の挿絵である。【図5】と同じく新聞に描かれた挿絵だが、一方は事実を報道する目的の図、本図は想像された保姆を描いた図という違いがある。小説の中には「保姆の安田」という人物が登場する。政治家の桂田の家に奉公に来て、子の世話をしている人物である。本文にはその容貌を以下のように記述している。

「三十前後とも見える年輩、女にしては脊も豊なるに、身用意の宜さ相な衣服の着こなし、浴衣の衣紋しやつきりと折目立つて、帯も今締直したかと思はる、結び様、下膨の顔は目立たぬ程に巧に化粧して、切長の細い目には鍍金か何か知らず、金縁の近眼鏡を掛けて居る。」以上の記述や挿絵からは、背が高く、着物に帯をきちんと締め、眼鏡の下に薄化粧を施した、隙が無くやや冷たい人物との印象を受けるが、本文中の行動の描写からは主人をよく助け、令嬢を愛情深く世話をする有能な人物として描かれている。個人宅で働く保姆ではあるが、女中を軽くたしなめる場面や子をあやす際に「小聲に唱歌を唱ひて」とあるように、子守の女中とは区別し、幼児教育を学んだ保姆として描かれている。

【図15】 新案女學雙六

作者・武内桂舟／画 巖谷小波・廿三階堂／案 発行元・博文館

制作年・明治三十七年（一九〇四）

形態・双六、木版色摺

双六の出発点であるふりだしに描かれた幼稚園の図。園児が手をつなぐ輪の中で座る保姆が描かれている。束髪に着物と袴を着た保姆は園児とともに手をたたいて歌を歌っているようだ。これまで示した他図と比べて授業で物事を教えている上下のある関係よりも、むしろ園児の視点に立って優しく歌に参加しているような印象を受ける。



【図16】《幼稚園ノ運動》  
玉川大学教育博物館

【図16】 幼稚園ノ運動  
作者…三木直吉 版元…三木直吉  
制作年…明治四〇年（一九〇七）  
形態…木版色摺

【図15】《新案女學雙六》個人蔵  
画像提供：学習院大学史料館

本図は一枚絵の木版色摺の錦絵だ。園児は楽しそうに手をつないで輪になっている。その中央で保母がヴァイオリンを弾く。これまで紹介した作例では、園児と歌を歌う際にはオルガンやリズムをとる笏拍子、または手をたたくという行為で参加していた保母であったから、これまでと異なるイメージが描かれていることになる。矢絣の着物に袴を着て、髪は流行の二〇三高地髷を結っている。上段には、一列になって席に着き、積み木（恩物）をする園児が描かれる。

【図17】 少女出世雙六  
作者…鏑木清方／画 巖谷小波／案 版元…博文館  
制作年…明治四一年（一九〇八）  
形態…双六、木版色摺

全体

部分

【図17】《少女出世雙六》個人蔵  
画像提供：学習院大学史料館

本図はコマを進めるごとに少女が成長していく双六で、その一コマが幼稚園である。題名にもあるように、この双六の中では幼いころから教育を受けるといことが、少女が「出世」を得るために必要なものとされている。保母が手をたたいて園児に何かを教えているようだ。園児も保母を真似て手をたたいている。園児は洋服に前掛けを着ける。保母は、

袴姿に髪を高く結び上げた束髪である。背景には草花が咲き、青空のもとで外遊びをする様子が描かれている。

## (二) 全体の特徴およびまとめ

以上、作例とその特徴を具体的にみてきた。ここで一度共通点と時代による相違点などの特徴をまとめてみよう。

まず作例に共通していることは、園児が皆おとなしく保母の言うことを聞いている点である。机の上で恩物を行ったり、保母が皆の前に立って掛絵の前で授業を行い、それを整列した園児が聞いている。唱歌や外遊びでも、園児は保母のほうを向き、あるいは指示に従っている。【図11】に描かれている園児は課題よりも隣の子に気を取られているものの、保母が困るほどのことは描かれていない。あくまで、描かれているのは保母の言うことをきちんと聞き、積極的に授業や唱歌に参加する園児の姿である。また、輪になって楽しそうに歌う様子が頻繁に描かれるが、ここでもやはり、保母が中心となって調子をとるところに共通点があるだろう。近世以来の市井の教育機関である寺子屋や子どもが遊ぶ様子を描いた浮世絵と比較すると、寺子屋は子どもが自由に入り乱れて描かれているのに対し、幼稚園を描いた作例の特徴には同じ年ごろの子どもが、整列して年長者（統制する者）の話を聞いているところにある。そのような環境にあつて保母は厳しくも優しく園児と接している。

続いて、題材に関する特徴を見ると<sup>34</sup>、最初期は、フレーベル教育法を説いた本の翻訳本からのイメージの引用がみられ、「家鳩」といった特定の唱歌遊戯を行う様子が選択された。しかし、時代が下ると特定の唱歌遊戯を描くことはなくなり、タイトルにも「唱歌」とだけ書かれはじめる。そして、幼稚園の授業の様子が取り上げられていく。取り上げられる題材を先に挙げた「東京女子師範学校附属幼稚園規則」【表1】や関信三の『幼稚園法二十遊戯』【表2】と見比べてみると、第十恩物

の「図画法」や第十四恩物の「織紙法」など机の上で保母の指導の下で行う恩物授業が数多く描かれる。しかし、【図13】明治三五年（一九〇二）以降は恩物を主題に取り上げなくなるようになる。変わりに、唱歌遊戯や外遊びを題材として取り上げるようになる。これは、次第に子どもの自発的な遊びが重視され旧来の恩物中心の教育方法への批判が高まってきた時勢が反映されているのだろう。例えば東京女子師範学校附属幼稚園の教育方法に強い影響を受けていた大阪市愛珠幼稚園（明治十三年創立）は、明治二年（一八八八）ごろから恩物教育の改良に乗り出し、明治二六年（一八九三）には読み方書き方の授業は「幼児ノ能力ニ摘セザル」と廃止された<sup>35</sup>。また、明治三九年（一九〇六）の女子高等師範学校附属幼稚園の保育要項を見ると、恩物について「其取扱ヒヲ多方的ナラシムルコト」と画一的な指導をせず、園児に適した使用を行うよう注意が示されている。それまでの恩物教育や読み書き計算中心の知識を詰め込むような教育から、幼児の自発的な活動を尊重した保育内容に見直しがなされていくにたがって恩物教育という題材が消えているといえ、作者が保母や幼稚園に関する社会の変化に無関心でいなかったことがわかる。

次に、描かれている保母の服装に着目したい。足元まで覆われたドレスを着ている保母は明治二三年（一八九〇）まで見られる。しかしそれ以降は、羽織に袴という江戸時代には男性の服装であった衣服を着ている。また、多くの保母の髪型は、明治以降になって流行した、髪をひとまとめにして束ねる束髪というスタイルである。明治十六年（一八八三）、井上馨（一八三六〜一九一五）によって推し進められていた欧化政策の影響で、皇族や華族を中心に洋装がはやり、上流子女に向けて洋装の裁縫を教える学校が東京にも数カ所あらわれ、明治二〇年（一八八七）には『男女服装 西洋裁縫指南』などが出版されるほどであった。その影響もあつてか上流階級の子女が通う東京女子師範学校附属幼稚園でドレ

スといった洋装がみられるのだろう。明治十二年からは毎年残っている東京女子師範学校小学師範科卒業式の写真<sup>36</sup>をみると、明治十九年（一八八六）七月から明治二十六年（一八九三）三月の間の卒業生はみなドレスを身に着けている。絵画画面に登場する洋装と卒業写真と政府の欧化政策とのおおよその時期が重なっているのだ<sup>37</sup>。同校の附属幼稚園に通う園児や保姆の実際については、明治二三年に武村耕靄によって描かれた《幼稚保育之図》【図8】よりうかがい知ることが出来る。

武村耕靄（一八五二～一九一五）は、仙台藩士武村仁左衛門の長女として生まれた。本名を千佐子という。幼いころから狩野探逸や狩野一信、春木南溟、山本琴谷、川上冬崖に師事し画を学ぶ。また、明治六年（一八七三）より横浜共立女学校で英語を学び、機会を得て明治九年（一八七六）には東京女子師範学校に英学教授手伝いとして着任し、明治十年（一八七七）ごろから洋画を中心とした画学教授として女子教育に努めた人物である。自身が勤めていた東京女子師範学校の幼稚園の様子を描いた武村耕靄による《幼稚保育之図》とその下絵が現存している。下絵には

此園ハ女子高等師範学校附属幼稚園ノ実況ヲ模写シテ日本美術協会秋季展覽会出品セシモノ、稿ナリ

時于明治廿三年九月

と記されている。このことから、作者の中で東京女子師範学校附属幼稚園の実態を描こうとする強い意識が見える作例であり、当時の状況を知らることが出来る重要なものである。前述のとおり、本作には幼稚園の様子を四段に分けて描いていて、そこに登場する保姆の姿は、和装と洋装のドレスを着た姿が描かれている。園児の中にも洋装の者が数多く描かれる。富裕層の子女が通う同園の園児だけでなく、保姆もまた、洋装でドレスを着用して保育をしていたのだろう。ここで比較したのは、裕福な子女が集まる東京女子師範学校の卒業写真であるが、幼稚園は裕福

な家庭の子が通う園から貧困層の子が通う園まで幅広く存在する。それでは、一般の人々が通う幼稚園の保姆はどのような様子だったのだろうか。次章で、当時の写真資料との比較が可能であった久保田米僊作《園児遊戯図》と《唐子遊び図》を見る。

## 二章 久保田米僊 《園児遊戯図》《唐子遊び図》

### （一）教育と絵画に関する言説

久保田米僊は、京都画壇の近代化を語るうえで幸野楳嶺（一八四四～一八九五）とともに欠かせない人物だ。明治十一年（一八七八）に幸野楳嶺、巨勢小石（一八四三～一九一九）、望月玉泉（一八三四～一九一三）とともに、ひとつの流派に固執せず、さまざまな古画、流派様式を学ぶことが出来る近代的な画学校の設立を計画し、時の京都府知事に建議書を提出し、京都府画学校の設立に一役買った。明治十三年（一八八〇）には設立した京都府画学校に出仕する。その後、政治活動に精を出し、出仕取り消しになるが、明治十年代から明治二〇年代初めは京都で活動しながら私費でフランスに行き、明治二〇年代には東京を拠点としながらアメリカ、朝鮮に渡って活躍し、帰国後は広島大本營にて天覧揮毫を行った人物である<sup>38</sup>。

日本で最初の近代的な画学校設立に奔走したのちには、さまざまな場で教育と絵の関係について発言する機会を得たようだ。

明治二十六年に発行された『幼年雑誌』（博文館）の第一号には、「特別寄書大家」の一人として「小児画法」<sup>39</sup>という文章を寄稿して、小児に向かつて、絵を学ぶ必要性と絵の描き方を絵人で指南している。そこで、文字は学ばなければ理解できないが、絵は学ばずとも視覚情報から描かれているものを理解することが出来る描くこともできるということが説かれている。加えて、英雄の図は心を奮い立たせ、聖賢の像を見ては慎

み敬う気持ちが生じ、花鳥画は心地よい気持ちにさせ、名所図は旅行に行きたい気持ちを生じさせ、「人の美性を発達せしめ精神を高尚ならしめます。」と、絵画を学ぶ重要性を説いたうえで、絵の描き方を運筆の順序と共に紙面上で指南した。

事実、米僊は言葉が通じないシカゴ万博に行った際、汽車に荷物を置いたまま、昼食を取るため一時停車しただけの汽車を降りてしまい、置きざりにされてしまったのだが、その際に自分の状況を駅員に画を描いて示し、意思の疎通が取れたことで無事に次の汽車を教えてもらった、という経験をしている。このような実体験も手伝ってか、帰国後に出た画論や講演会でも、米僊は教育において絵画の重要性を繰り返し説いている。明治三二年（一八九九）に愛知県で開かれ、教師が数多く参加した愛知県教育会総集会における演説の内容には、「絵画と云ふ物は社会に大必要な物」と説き、文字とは異なり、絵画は未就学の小児でも描いているものを理解することができる、と述べている。以下、引用する。

絵画ト云フ物ハ社会ニ大必要ナ物デ、諸先生方ノ御執リニナリマス教育ノ利器トナリマス所ノ文字、此文字ト関係シテ居ル事ハ諸先生ノ能ク御承知ノ事デゴザリマス、此絵画ハ自然ノ物デゴザリマシテ、人間ノ脳髓ニ天賦デ特有ニ賜ツタモノデ、天地ガ開ケテ物象ガ出来ルト絵画ガ起ル、其物ノ形ヲ画クト云フ事デ、夫デ文明ノ利器トスル文字ハ御承知ノ如ク人造ノ物デ人ガ記憶ヲ存ズル記号カラ出ル物デ、此記号ハ何カラ出ルカト申シマスレバ即チ絵ナンデス（中略）今未学ノ小児ニ文字ヲ見セタ所デ読ミ得ル事ハ出来マセヌ、又文字ヲ書ク事ハ決シテ出来マセヌ、是ハ学ンデ初メテ知ル物デゴザリマス、然ルニ絵ハ未学ノ小児ニ見セマシテモ見得ル事ガ出来マス、其絵ヲ見テ虎ト云フ事モ判別シマセウシ、（後略）<sup>40</sup>

また、明治三五年（一九〇二）刊行の『画法大意』五頁の中でも子どもが絵を理解することについて触れている。

文字は絵画なる「自然の形似」より発達したる成形体に属するものなるを以て、未だ学齢に達せざる小童幼児のものには、これを解するにくるしむものなるも、畫形は彼等自ら之をつくり、またひとり之によりて、その物体の名を指し、（後略）<sup>41</sup>

また、米僊は二十代の頃から教育機関に作品を納める機会があった。米僊二二歳の頃尚徳小学校校舎落成の時にはそれを記念して、明治七年（一八七四）に《孟母斷機図》<sup>42</sup>を制作し、同校に贈った。また、明治十年（一八七七）二五歳の頃には、嘉楽小学校移築を記念して制作された扇面墨摺りの《嘉楽校之図》<sup>43</sup>が知られている。そして、尚徳幼稚園に贈られた可能性が指摘されている《園児遊戯図》《唐子遊び図》は三十代半ばに描いた幼稚園の園児と保姆と中国の喜祥画題を描いた作例である。以上、言説や絵画作例から、米僊がごく若いころから亡くなる晩年に至るまで、教育と絵画について関心を持ち続けていた人物であったことがわかった。

つづいて明治二〇年代の関西地方の保姆の服装についてその実態を確認し、二章で挙げた保姆の服飾における絵画イメージについて触れておきたい<sup>44</sup>。

実際に保姆であった武村耕靄が描いた【図8】も、保姆が働く姿の実態を示す資料となり得るが、ここでは富裕層以外の子供が通う幼稚園の保姆の事例として、首都（東京）以外にあり、職人の子供たちが多く通ったであろう《園児遊戯図》《唐子遊び図》を取りあげる。また、同時代の写真や新聞挿絵が現存することからも、実際の様子と絵画イメージを比較する上で最適である。

## (二) 同時代資料との比較

右幅《園児遊戯図》左幅《唐子遊び図》は、現在京都市学校歴史博物館に所蔵される紙本墨画淡彩の対幅である。作品が贈られた可能性が指摘される楊梅幼稚園(後の尚徳幼稚園)は、明治二年(一八八八)二月に尚徳小学校の敷地内の一室に仮に設けられた<sup>45</sup>。同園付近は、数代続く仏具師が居を構える土地であつたらしく、上流中流の家庭ではなく、職人の町であつたようだ<sup>46</sup>。それでは本地域での様子はいかなるものであつたのだろうか。

《園児遊戯図》(縦九五・五センチ、横一四〇・〇センチ)は画面右下に「米僊画」の款記、朱文方印「簡伯氏」とある。《唐子遊び図》(縦一〇一・〇×横一三九・〇)は画面左に「米僊写」、朱文方印「簡伯氏」とある。制作時期については、幼稚園が開園した明治二年から米僊が東京に拠点を移す明治三年(一八九〇)の間とされている<sup>47</sup>。画面では三名の保姆の間を十六名の園児が列をなしている。画面上部右面には、鍵盤に手をのせ、オルガンを弾く女性が描かれ、そのドレスには首元と手にフリルがつき、生地には朱色の模様がある。ウエストが細くすぼまり、スカートの裾は足元までたつぷりと長い。頭には飾りやリボンがついた帽子をかぶり、画の中では唯一座っている。画面下部中央には、縦縞の着物に黒い羽織を着ている保姆の後ろ姿が描かれ、髪を後下でまとめ、白い花を挿している。黒い革靴を履いた左足のつま先を少し上げて、子どもたちに踊りを教えているようだ。左側に立つ女性は笏拍子を打ち鳴らし、リズムをとりながら口を開けて歌っている。体は正面に、顔は子供のほうを向き、優しく視線を交わ合せている。後ろ髪は耳より少し高い位置で束ねて、前髪を眉の上で短く切りそろえている。縦縞模様の着物を着て、襦袢の代わりにシャツの襟が見える。この保姆のように着物の下にシャツを着て革靴を履く姿は同時代の錦絵にたびたび登場する。明治二三年発行の楊州周延(一八三八〜一九一二)による《幻燈写

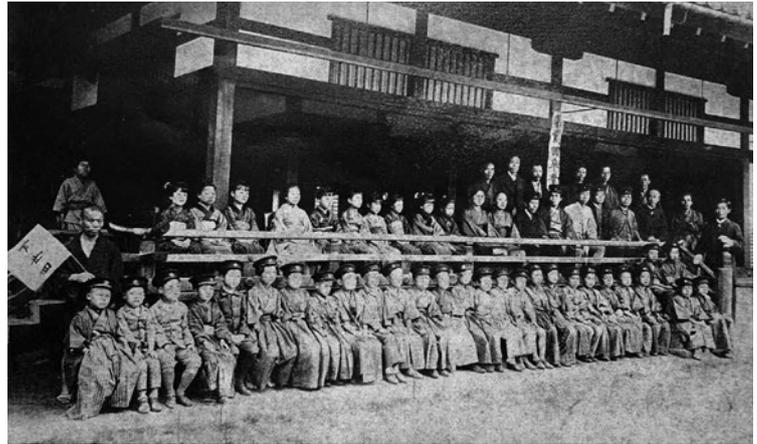
心鏡 女史演説》に描かれる女性も、着物の中にシャツを着て、靴を履いている。髪には洋風の造花の髪飾りをさし、右手に洋傘、左手に分厚い洋本を抱え、丸い幻燈に映し出された男性たちの前で演説をする女史のように社会を牽引する女性にあこがれのまなざしを送っているらしい場面である。明治時代に洋装が日本に流入したが、実際に着るのは皇族や華族、西洋人と接する人々に限られており、一般には昭和まで着物が主流で、髪飾りや傘等の小物に洋風を取り入れていた。元々洋装であつたシャツを着物の下に着たことも洋風を取り入れたものだろう。当時、勉学に励んでいた女学生の間で流行つたファッションであつた。園児は、着物姿や洋装が入り混ざって描かれている。画面中央付近に描かれ、保姆に見守られている先頭の五名は筆数も多く、特に力を入れて描かれたようだ。順に、一番目の園児は着物に黒い革靴を履き、二番目の子はグレーがかつたセーラー服の上下を着て足元はやはり靴である。三番目の子は黒い伊達襟、黄色や白の模様の着物に赤い帯が鮮やかだ。足元には帯と同じ赤い鼻緒の草履をはいている。四番目の子は赤いチェックのワンピースに横縞の靴下と革靴を履いている。五番目の子は羽織に縦縞の袴を身に着け、黒い革靴を履いている。

以上、保姆と園児は、和装、洋装、履き物の組み合わせが様々であつた。続いて尚徳幼稚園が同敷地内にあつた尚徳小学校の明治二二年(一八八九)の卒業式写真を見る。【写真】本卒業写真は直接幼稚園の園児を写したものではないが、米僊の作品とほぼ同時期にあり、同校内の人々の実態を窺い知る上で重要である。写真に写っているのは皆尋常四年生である。学童が二列に並んで座っている。前列には男児、その後ろに女児が座り、画面左に一名と画面右側に多数の教諭と思われる成人が並んでいる。建物の左側に立つ男児は詳細不明である。女性教諭と思しき女性が二人写っている。どちらも髪を後ろでしる束髪で、和服姿である。男児たちは皆、帽子をかぶり、前列左端の男児は羽織に胸の高い

位置から襠高袴を履き下している。その隣は、上着と長ズボンを履き、靴下と靴を履いている。隣の男児は半ズボンに長い靴下を履いているようだ。左から四番目の男児のように着物に草履という姿の学童もいる。袴からのぞいている足をみると、草履だけでなく靴を履いている学童も少なくない。男児の服装には和装、洋装が入り混じっているようだ。女児の人数は男児の三分の一で皆、着物姿である。

一方、前章で紹介した【図5】も、ほぼ同時期に大阪で発行された新聞に掲載されたものだ。新聞挿絵という性格上、明治二〇年（一八八七）の関西地方の保母の実態を知るうえで有益な資料といえるだろう。前述のとおり、保母は黒の羽織を着て、園児は着物や洋服を着ている。男児は洋服を着ているが、女児はみな和装姿である。

以上、三点の比較検証から、より実態を反映したと考えられる写真と新聞挿絵を見る限り、明治二〇年から二二年（一八八九）にかけて、関西地方の保母は和装姿であって、ドレス姿は一般的ではなかったと考えることが出来る。女児も同様である。ところが、《園児遊戯図》および《唐



【写真】 1889年の尚徳小学校卒業写真。  
『閉校記念誌 尚徳 一輝ける138年のあゆみ—』  
京都市教育委員会、2009年3月より転載

子遊び図》には、洋装姿の園児と保母が描かれている。米僊は明治時代に新しく登場した「幼稚園」を描くにあたって、そこで働く保母の姿を、新時代の働く女性の姿として象徴的に「ドレス」という新しい衣服を身にまとわせたのだろう。

### おわりに

本稿では、保母が描かれた作例の収集と考察に注力し、加えて幼稚園が描かれた時代に、実際には保母はいかなる姿で働いていたのか、久保田米僊の《園児遊戯図》《唐子遊び図》と実際の写真および新聞資料をもとにみた。今回取り上げた資料は、媒体や鑑賞対象が多岐にわたっており、そのことも考慮に入れて分類整理をすることが今後の課題である。まずはじめに、明治期の幼稚園について政府の政策を中心に確認した。一章では、具体的な作例を挙げることで保母という統制する者と、整列する園児という構図が浮かび上がってきた。そして、このことは幼稚園にとどまらず、小学校以上の近代教育全体に当てはまることでもあり、本稿で取り上げた幼稚園の絵画イメージの中にも確認することが出来る資料群ととらえることが出来るだろう。これは、幼稚園で重視された唱歌といった授業が近代国家として日本が歩みを進めるために、人々を意識レベル、身体レベルで近代化、国民化を行った結果、絵画イメージではかわいらしい園児と保母の様子だが、その絵画イメージの深層にも既に国民化の意図が含まれているのである。

また、題材の変化が社会の時勢を反映していることを考察した。明治後半ごろから恩物教育を中心として形式を重視した知識詰込型の教育が批判され、園児の自発的な活動を尊重した保育内容に見直されていった背景があり、絵画イメージの中にはそれらに対応して、それまで机の上で行われていた恩物授業から、唱歌や外遊びなどが題材としても取り上

げられ始めていたのであった。【図1】～【図12】までは、恩物を画題に取り入れ、保母が授業で教え、統率を取る指導者としての姿が描かれる。しかし、【図13】が描かれた明治三五年以降、恩物中心の教育方法の批判の高まりにより、生徒の自発性を重んじる唱歌遊戯や外遊びが題材に選ばれ、園児と共に歌い遊嬉する優しげな姿として描かれるようになったことを提示した。既存の保育内容への批判やその議論は、作品を描いている側や作品で遊ぶ側にとどのような媒体で伝わったのか、それらも併せて解明することが今後の課題である。

続いて、保母の服装は、明治二三年（一八九〇）ごろまでは足首まで隠れるほどのドレス姿であったが、その後洋装の保母は絵画上に登場しなくなる。政治的な欧化政策の時勢を受けて、絵画イメージに反映されているといえる。加えて二章で検証したように、現実の世界では洋装姿の保母や教員、女児があまり見かけられない地域でも絵画イメージにドレスや束髪、女学生の間で流行したネルシャツを着物の下に重ねる流行が描かれていた。その他、本稿で挙げた他の作例の中でも、洋装の保母や園児が登場する。これは、当初官立で初めて開設され、その後も全国に手本として普及した東京女子師範学校附属幼稚園の人々のイメージがフレール教育の保育方法とともに普及していったのだろう。それだけでなく、流行のファッションを取り入れて描かれた保母の姿には、保母という新しい職業に重ねるように、最新のファッションに身を包んで働く、最先端の職業であるイメージが重なっているのではないだろうか。当時の洋風の衣服に対する一般に抱かれていた印象が羨望であったのか、あるいは憎悪であったのか、地域によっての偏りもあるだろう。保母に対する目に見えない同時代のイメージをつかむには、今後も調査や考察の集積と多角的な検証が必要である。加えて本稿では簡易幼稚園に關してほとんど触れることが出来なかった。次なる課題としたい。

〔謝辞〕本稿を執筆するにあたり、美術史家の乾淑子氏、当館学芸員の岩城紀子氏には執筆の過程で貴重なご意見を賜ったことを心より感謝したい。また、京都市学校歴史博物館学芸員の森光彦氏には、館所蔵の資料を閲覧させていただくことにとどまらず、様々なことをご教示いただいたことを深謝申し上げます。日本髪や束髪についての貴重なお話を聞かせていただいたかなすぎ美容室、貴重な作品の画像をお貸し出したいた各館およびご所蔵者に深く感謝したい。

【註】

- 1 本稿では幼稚園保育者のことを「保母」と表記する。「保母」は明治期の東京女子師範学校附属幼稚園規則以来、戦前期までの幼稚園保育者の名称であった。「母」は乳母、女の教師という字義を持つ。「保母」は「保育」を担当する女の先生という意味の造語だろうと、汐見稔幸・松本園子・高田文子・矢治夕起・森川敬子『日本の保育の歴史 子ども観と保育の歴史150年』（萌文書林、二〇一七年）の序の部分で述べられている。
- 2 汐見稔幸・松本園子・高田文子・矢治夕起・森川敬子『日本の保育の歴史 子ども観と保育の歴史150年』萌文書林、二〇一七年、十五～五二頁。
- 3 万葉集五卷八〇二。
- 4 万葉集五卷八〇三。
- 5 柳谷武夫訳『日本史4キリシタン伝来のころールイス・フロイス』平凡社東洋文庫、平凡社、一九七八年。
- 6 柴田純『日本幼児史 ―子どもへのまなざし―』吉川弘文館、二〇一三年
- 7 とはいえ、江戸時代に捨て子の風習がなくなったわけではなく、貧困、虐待、さまざまな理由で捨て子をする親は後をたたない。そのあたりを詳しく書いているのは、沢山美果子『江戸の捨て子たち―その肖像―』吉川弘文館、二〇〇八年。
- 8 このことについて、前掲6や太田素子『子宝と子返し』藤原書店、二〇〇七年には近世初期に「家」と「村」が成立していく過程とそこから子宝思想が生まれていったこと、その他論争点や他の論考の紹介がまとめられている。
- 9 戦後の日本は、幼稚園（ここでは、幼児の遊びと教育的な指導を目的とする）と保育所（乳幼児の遊びや教育、生活的な家庭への支援を目的とする）といっ

- た二つのタイプの幼児教育施設があり、「幼保二元体制」といわれていたが、ここでは以上の二つを明確に区別する段階にはまだなく、論が複雑になってしまったため、明治期の託児所、幼稚園で行われる教育行為を区別することなく、「幼児教育」と表記する。
- 10 前掲2。
- 11 米国博覧会事務局編『米国博覧会報告書 第二巻 日本出品目録』米国博覧会事務局、一八七六年、七五頁。
- 12 ヨミタス歴史館 読売新聞一八七七年、十一月二十八日、二九日朝刊に詳しく書かれているが、ここでは二八日の記事を引用する。
- 「昨日ハ 皇太后宮と皇后宮が午前十時の御出門にて女子師範学校へ 行啓になり文部大輔の御先導にて御休息所へ入らせられ遊嬉場、開遊室などにて玩具、幼稚の製作物、遊嬉のさま、球の遊び、体操、織紙、鎖の連接なども御覧になり唱歌、奏楽も御聞になり師範学校をも御通覧になり御中食を済ませられ還御に成り供奉ハ萬里小路、吉井、杉、竹内、伊東その他の外の方々と女官ハ高倉典侍外数人で有りました(是について皇太后宮 皇后宮の御言葉その外演述唱歌などハ紙がせばいから明日出します)」
- 13 恒川平一『御歌所の研究』、一九三九年、一七二頁。
- 14 日本で初めての保姆養成機関は、明治十二年(一八七九)開設の東京女子師範学校保姆練習科である。
- 15 例えば、展覧会「学びの風景—明治のおもちゃ絵、絵及六に描かれた教育—」(玉川大学教育博物館、二〇〇八年)や展覧会「明治維新から150年 浮世絵にみる子どもたちの文明開化」(町田市立国際版画美術館、二〇一七年)など、展覧会のコーナー内に「幼稚園」のテーマを設けたものはこれまでもある。
- 16 文部省編『幼稚園百年史』ひかりのくに、一九七九年、五〇五頁。
- 17 和崎光太郎・森光彦『学びやタイムスリップ 近代京都の学校史・美術史』京都新聞出版センター二〇一六年、十六頁。
- 18 前掲2、高田文子「近代国家の成立と保育施設のはじまり」『日本の保育の歴史 子ども観と保育の歴史150年』萌文書林、二〇一七年、八二頁。
- 19 この入園料は公立小学校授業料の最高額に匹敵し、おのずと入園者は富裕層の子女に限られていった。
- 20 明治十二年(一八七九)二月に鹿児島女子師範学校附属幼稚園、同五月に大阪府立模範幼稚園、六月に宮城県仙台区木町通小学校附属幼稚園が設立された。
- 21 前掲2、三七八頁に詳しくまとまっている。
- 22 文部科学省ホームページ「学制百年史」五 幼稚園の創設より。
- 23 牧野由理「明治期の幼稚園における図画教育史研究」風間書房、二〇一六年、二八—二九頁。
- 24 関信三『幼稚園法二十遊戯』、明治十二年三月 国立国会図書館蔵。
- 25 【表2】に示した恩物は、前註24前掲書で挿絵とともに詳細が紹介された内容をまとめたもの。
- 26 Johannes and Bertha Ronge "A Practical Guide to the English Kindergarten (Child's Garden), for the Use of Mothers, Governesses, and Infant Teachers," 1872. 筑波大学図書館所蔵
- 27 前註23、四八頁。
- 28 中央正面に描かれた保姆の右手側に立つ着物の子ども。
- 29 森光彦「作品紹介 久保田米偲が描いた二つの遊戯図 —唐子と園児—」『京都市学校歴史博物館研究紀要』、京都市学校歴史博物館、二〇一三年。
- 30 本構図は、本作の制作時期と同じ時期に制作された米偲による雑誌挿絵「東都洛外盆踊乃図」(明治二年)【挿図3】と類似し、足を踏み出し、前に進みながら踊る様子や中央の頬かむりをした女性の後ろ姿が、本図の黒い羽織を着た保姆の姿と重なる。米偲は、本図のような肉筆画を手掛ける一方で、扇面画の下絵を描いたり、雑誌の挿絵も手掛けた。このように、他の仕事の成果が相互に反映されることもあるだろう。
- 31 《唐子遊び図》は、中国でも吉祥画題として描かれる中国風の風俗をした子供たちが無邪気に遊ぶ様子を描いたものだ。年長と思しき子が籠から芙蓉を出し、右手で指さしている。画面左の子どもがそれを手を挙げて求めている。右下の子は、座って花を指さしながら



【挿図3】《東都洛外盆踊乃図》『風俗画報』21号部分  
江戸東京博物館 (94201992)

- 見上げている。花を掲げる子供が頂点となり、左右人物を配することで、三角形を作り、重心が下にある安定した構図になっている。右下の子のポーズは、円山応挙の《唐子図》（個人蔵）を反転させると一致しており、米偲の古画学習がよくわかる作例である。
- 画面左側ではしゃぐ三人の子どもはそれぞれ腕輪や頭につけた輪（『西遊記』には緊箍児呪きんこじという頭の輪が登場する）や耳輪が登場する。これらの意味は今後の課題とするが、応挙作品の中で唐子や子供を描いたものと比較したところ、本図のような装身具を身に着けた唐子は見つからなかった。一方、清代の市井で愛された木版画である蘇州版画を見てみると、頻繁に腕輪といった装身具を身に着けた唐子が登場する。米偲が当時蘇州版画を目にしたかは不明であるが、少なくともただ単に応挙が描く唐子の作例を模倣するのではなく、さまざまな流派から制作に必要な技法や知識を選択しているといえるだろう。
- 32 本稿で取り上げている保母が描かれた作例は、ほとんどが幼稚園の授業の様子や授業イメージをひとつひとつ説明するように描いている。特に、【図7】の双六は、画面を分割して恩物や唱歌の授業、遊戯の様子を作品をみたものが具体的に理解できるように描いている。一方で、【図6】は幼稚園の唱歌遊戯の様子と唐子が遊ぶ様子を対幅にすることで、ひとつのメッセージを示している、他の説明的な作例とは一線を画していると言えるだろう。
- 33 本図の下絵が現存しており、下絵には「此園ハ女子高等師範学校附属幼稚園ノ実況ヲ模写シテ日本美術協会秋季展覽会出品セシモノ、稿ナリ 時于明治廿三年九月」と記されている。
- 34 【表3】、「題材・内容」を参照。
- 35 愛珠幼稚園『沿革誌』一九〇三年、前註2、一四九頁。
- 36 お茶の水女子大学デジタルアーカイブズ。
- 37 犬塚孝明「鹿鳴館外交と欧化政策」（『明治聖徳記念学会紀要 創刊第四十八号—特集「近代日本の国際交流」—』二〇一四年）には欧化政策は明治十六年（明治二〇年）とある。
- 38 その後、明治三〇年（一八九七）には石川県立工芸高校の教授となるが、明治三三年（一九〇〇）には眼病を患い退職。その後翌年失明した。失明後は絵画評論や画論など、多くの執筆活動に精をだし、明治三九年（一九〇六）に胃癌のため五五歳で逝去した。詳しくは、以下を参照のこと。
- 今西一「メディア都市京都の誕生」『近代ジャーナリズムと諷刺漫画』、雄山閣

- 出版、一九九九年。
- 岩城紀子「久保田米偲の巴里万博見聞日記」『京都日報』連載「渡航画報」を中心に、「『東京都江戸東京博物館紀要』第九号、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館、二〇一九年。
- 久保田米偲、久保田米齋、久保田金仙／著 大谷正、福井純子／編「描かれた日清戦争・久保田米偲『日清戦闘画報』」、創元社、二〇一五年。
- 福永知代「久保田米偲の画業に関する基礎的研究（1）」『お茶の水女子大学人文科学紀要 第五十五巻』、お茶の水女子大学編、二〇〇二年。
- 福永知代「久保田米偲の画業に関する基礎的研究（2）」『お茶の水女子大学人文科学紀要 第五十七巻』、お茶の水女子大学編、二〇〇四年。
- 39 「（前略）…なれど絵画は学ばずして、其形似を判じ、亦自からも方角の形似を、何人と雖も描き得ませう。」『幼年雑誌』（博文館）十六頁〜十七頁。
- 40 藤尾武吉編「愛知教育雑誌 第一四五号」愛知県教育会事務所、一八九九年、三頁。
- 41 石川景蔵編「久保田米偲述」米偲自伝「米偲画談」松村三松堂、一九〇二年、五頁。
- 42 尚徳中旧蔵、現京都市学校歴史博物館蔵。詳細は、森光彦「作品紹介 久保田米偲筆《孟母断機図》（元尚徳中学校蔵）について——教育における絵画の「用」——」『京都市学校歴史博物館研究紀要』京都市学校歴史博物館、二〇一二年、六〜十一頁参照。
- 43 前掲18、八九頁。
- 44 執筆者は平成三二年二月から調査を行い、乾淑子による基礎研究B「服飾からみる近代日本の生成」の報告書に寄稿した。その内容をまとめる。
- 45 閉校記念誌『尚徳 輝ける一三八年のあゆみ』京都市教育委員会、二〇〇九年、二〇頁。
- 46 『尚徳校誌』尚徳尋常小学校、一九一四年三月、一〇一頁。
- 47 前掲29。

【表3】(執筆著作成)

番号	資料名称	作者	制作年	法量	発行者	材質形体	所蔵	題材・内容	装い
1	幼稚園巻之下	桑田親五/訳	1876年-1878年 (明治9年-11年)	—	文部省	木版墨摺 書籍挿絵	国立国会図書館	唱歌遊戯	保姆：洋装 園児：洋装
2	幼稚園真戯劇之圖(写し)	青水/画	1878年 (明治11年頃)	69.3×101.0	—	—	お茶の水女子大学歴史資料館	唱歌遊戯	保姆松野クララは洋装、保姆豊田美雄、保姆近藤浜は着物に羽織 園児：洋装、着物、羽織袴
3	幼稚園初歩巻一	飯島半十郎/著 学新竹か/画	1885年 (明治18年8月)	—	青海堂	木版墨摺 書籍挿絵	国立国会図書館	恩物(織紙)	保姆：着物 園児：着物
4	学校技芸言語録	井上探景/画	1887年 (明治20年11月)	75.0×71.0	松野米次郎	木版色摺 双六	都立中央図書館特別文庫室	その他・授業	保姆：洋装 園児：洋装
5	大阪朝日新聞 1887年2月8日号 2面	未詳	1887年 (明治20年2月8日)	—	大阪朝日新聞	新聞挿絵	—	唱歌	保姆：着物、黒羽織 園児：洋装、着物
6	園児遊戯図 唐子遊び図	久保田米穂/画	1888年-1890年 (明治21年-23年)	右幅95.5×140.0 左幅101.0×139.0	—	紙本墨画淡彩	京都市学校歴史博物館	唱歌遊戯・その他	保姆：着物、黒羽織、洋装、靴 園児：洋装、着物 オルガンあり
7	教いく幼稚園就学言語録	国秀/画	1889年(明治22年)	47.0×71.0	森本須三郎	木版色摺 双六	玉川大学教育博物館	式典	保姆：着物・袴 園児：洋装、着物
8	幼稚園保育之図	武村耕齋/画	1890年(明治23年)	170.0×81.7	—	絹本着色	お茶の水女子大学歴史資料館	①授業 ②恩物 ③唱歌 ④外遊び	保姆：着物、洋装 園児：洋装、着物 オルガンあり
9	幼稚園教育遊双六	小国政/画	1892年(明治25年)	74.0×49.0	福田熊次郎	木版色摺 双六	国立教育政策研究所 教育図書館	①わらべ歌 ②授業 ③授業 ④式典 ⑤授業 ⑥わらべ歌 ⑦外遊び ⑧外遊び ⑨式典	保姆：羽織、袴袴、着物 園児：洋装、着物
10	幼稚園双六	山崎暁三郎/著	1892年(明治25年)	74.0×49.0	山崎暁三郎	木版色摺 双六	江戸東京博物館	外遊び	保姆：着物 園児：洋装、着物
11	『風俗画報』第73号「遊戯室の図」	坂巻耕漁/画	1894年 (明治27年6月10日)	26.0×18.7	東陽堂	挿絵	江戸東京博物館	①恩物 ②その他(通学) ③唱歌遊戯	保姆：羽織、袴、束髪 園児：洋装、着物 オルガンあり
12	小供風俗幼稚園雙録	宮川春汀/画	1896年(明治29年)	78.5×70.3	秋山武右衛門	木版色摺 双六	国立教育政策研究所 教育図書館	①その他 ②恩物 ③外遊び ④唱歌	保姆：着物、束髪、銀杏返し 園児：洋装、着物 オルガンあり
13	『風俗画報』第252号「華族女学校春季運動会 幼稚園遊戯」	小林洗美/画	1902年 (明治35年6月10日)	26.0×18.7	東陽堂	挿絵	江戸東京博物館	外遊び(競技)	保姆：袴、束髪 園児：洋装、着物
14	大阪毎日新聞 1903年3月29日号8面「新夫人」	武内桂舟/画 巖谷小波・廿三階堂/案	1903年 (明治36年3月29日)	—	—	新聞挿絵	—	唱歌	保姆：着物、眼鏡、束髪
15	新案女學雙六	三木直吉/画	1904年(明治37年)	53.2×78.8	博文館	木版色摺 双六	個人蔵	唱歌遊戯	保姆：着物、袴、束髪 園児：着物に前掛け、洋装
16	幼稚園ノ運動	三木直吉/画	1907年(明治40年)	28.8×11.3	三木直吉	木版色摺	玉川大学教育博物館	唱歌遊戯 積み木	保姆：着物、袴、二〇三高地髷 園児：着物、束髪
17	少女出世雙六	鎌木清方/画 巖谷小波/案	1908年(明治41年)	55.0×79.0	博文館	木版色摺 双六	個人蔵	外遊び	保姆：袴、束髪 園児：洋装、着物